

い。筆者が第一に敬服するのは著者の合理的

なものの方である。例えば院政の成立に
関する研究であるが、いわれてみれば何人も
受領と院政の關係を承認しない訳にはいかな
いが、それを導き出したものは、偶然によつ
ては歴史は動かないという合理的な考へ方に
基づくといつてよからう。また著者は人の捨
てて顧りみないような一見些末な史料に、奇
警にして卓抜な解釈を加えることにより、そ
れから歴史を理解する重要な手がかりを引き
出すという点にすぐれた手腕を示されるが、
その解釈が鬼面人を驚かすに止まる軽薄なも
のではなく、歴史の真相に迫つてゐることは
著者の合理的精神の賜ものであらう。

第二には賤民の研究において明らかなヒュ
ーマニズムの精神で、恐らくこれは著者の中
に流れている庶民的精神と結びついたもので
あらう。抽象的な議論や空疎な概念を避け、
常に物に即し、具体的に平易にそして明確に
敘述を進めてゆくのが著者の論文の特色であ
るが、それは庶民的精神と無關係ではない。
そしてまた不条理を排する合理精神につなが
るものもある。筆者はこの点、近世関西に
おける町人学者の伝統を著者に見る思いがす

る。

しかし伝統といへば、西田直二郎博士の文
化史と中村直勝博士の経済史とを受けついで
という意味で、京都大学日本史学の伝統が、
著者の学問の中に大きく流れていることをも
感じない訳にはいかない。それを政治史にま
で高めようというのが、本書の狙いかとも思
われるが、この伝統をどのように生かし、又
克服してゆくかが今後の著者林屋氏に負わざ
れた課題の一つであらう。やや書評の域を脱
したが、著者日頃の厚誼に甘えて所感の一端
を述べさしていただいた。論ずべくして及ぶ
ことのできなかつた点の多いことと併せて、
著者及び読者諸賢の海容を重ねてお願いす
る。(昭和三〇年一〇月一〇日 東京大学出
版会発行 A5 本文三七八頁 索引三七頁
五八〇円) — 直木孝次郎 —

秋岡武次郎著

日本地 図 史

著者はこの本の英文の序文のなかで、日本
は古地図研究の *stronghold* だと述べている。
たしかにわが國では古くからたくさんの地図
がつくられてきた。その今日に伝存するもの

もけつして少い数ではない。それらは地理学
や歴史学のいろいろな分野にしばしば貴重な
資料として利用されてもいる。だがその基礎
ともなるはずの古地図そのものの研究につい
ていへば、この「沃野」にはまだまだ広い未
墾地が残されているのである。

ここに紙をふるう軒し手の少なかつたこと
も専突だつた。日本の古地図の研究者とい
得る人は、明治以来おそらく十指にみない
だろう。古地図という資料の性質が簡単にノ
ートできる文書などとはちがつて蒐集が困難で
あり、研究者が多くの場合自分自身でコレク
ションをもたねばならなかつたことも、研究
のための障害だつた。だが日本の古地図学の
進まなかつたもつと大きな理由は、一般に古
地図への関心がうすく、あまりに特殊なテー
マだと考えられがちだつたうえに、研究者の
苦心の業績も発表には多くの精密な図版を必
要とするため刊行に大きな制約があつて、空
しく筐底にとどめねばならぬ場合が多かつた
こと、また同好の人たちの個人的な交流をの
ぞけば専門の学会はもとより研究のグルーブ
さえもなかつたから、個々のすぐれた研究が
学界の共通の資産とされる機会に恵まれな

つたことなどにあると思われる。とはいえもとより諸先学の論著もあり、近くは鮎沢博士の江戸時代の世界図を中心にした精力的な研究が注目されているけれども、やはり欧米の学界が、年々多くの専門書やファクシミルを刊行し、国際的規模をもつ専門誌を発行しているのにくらべると、まことに心ざびしい思いもするのである。

こうした展望は、わが国の地図学史研究の現段階では、研究の基礎となるべき正確な資料の提示とその系統化こそまず何よりも望まれる作業であることを教えるだろう。ただ、夥しい資料を遺漏なく且つ誤なく処理することは、けつして一朝にして成る仕事ではない。一生を古地図の蒐集と研究にかけた秋岡博士は、そのライフ・ワークの一部である日本地図学史によつて、みごとにこの要望に応じられたのである。一〇〇をこえる豊富な図版は読む者を豪華な古地図の饗宴に誘うが、その多くが著者自身の架蔵に帰した稀覯の図であることは、かえつてこの書の成るまでの長い辛勞を物語るものでもあらう。このりっぱな本を手にして、篤学の著者のために心からお祝の言葉を述べたいと思うのは、けつし

て私ひとりではあるまい。

序文によると著者の日本地図学史についての構想は、日本図編、国内地図及び測量編、世界図編、欧米人の日本地図作成史の四部から成るといふ。本書はその最初の、日本全国を主題とするもので、全編の叙述は次のような構成をもつている。

第一編 行基式日本図

第二編 行基式日本図よりも図形の進んだ

第三編 日本における最初の地図印刷

第四編 延宝年間以後の刊行日本図

第五編 日本地図作成史上の若干の事項

このなかで著者がもつとも力を注いだのは第一編の行基式日本図についてであつて、全頁数の約半分がこれにあてられる。行基菩薩作と伝えられるこの一冊の日本図は早くから学者たちの注意をひいてはいたが、この形式に属する諸図を一々検討してこれを系統づけることは、まだ充分に行われてはいなかつた。藤田元春博士の日本地理学史にも、藤貞幹が伝えた延暦二十四年改定の行基図について、その所在を知らないと記されているほどである。著者はその延暦改定図から筆を起

し、仁和寺所蔵の嘉元三年の図や、戦後発見された金沢文庫所蔵の日本図をはじめ、鎌倉、室町を経て江戸時代に至る諸図について詳細な解説を試み、さらに朝鮮、中国、ヨーロッパなど海外諸国に写伝された行基図についても懇切な説明を加えられた。第二編もこれをうけて桃山時代の日本図屏風から江戸初期、寛文の刊図に至る諸図を詳説し、行基図の古拙からようやく脱皮して新しい日本図が生れてゆく過程を描いている。この二つの編に、第五編のヨーロッパ製日本図や江戸初期のポルトラノ型日本図についての論考を補えば、いわゆる行基図から江戸初期に及ぶ古期の日本図に関する資料はほとんど網羅され、その全貌はここにはじめて明らかにしたといつてよいだろう。

ここで著者が多くの図を整理し秩序づけるためにとつている方法は、各図の異同を調べて特徴的な表現をとらえ、それに基づいてグループングを試みるという徹底した形式主義である。例えば中世の行基図は、志摩の国の島状の表現、墨利及び雁道という架空の土地の記載、東海上の松島、東夷東島、伊々島の附加という三つの指標の組合せによつて、四つ

の型に分類される。これはもとより地図学史家の好んで用いる基本的な方法ではあるが、さらにそれら各々の地図がわれわれに語りかける言葉、その地図のもつ意味について、著者がほとんど沈黙を守っておられるのは読者にとつていささか物足りなくもある。羅刹や雁道などの異様な国が——雁道を著者は雁の通路にあたる国と解されるが、ガンドウには強盗という意味もあり、雁道という文字をあつた地名も散見する——人々のどんな意識のなかで地図の上に姿を現わしたのか。また久しい年月に亘つて固執されてきた行基図が、室町時代の末ごろからどうして急に正確な図形へと推移しはじめたのか。それはその時代の新しい精神の醸酵とどんななかかりをもつのか。そんな疑問もおのずから湧いてこよう。後の問の一部には、著者は嗣出の測量編でそれに答えられるのかも知れない。望蜀の言葉ではあろうが、この書に地図作製の技術についての記述が省略されているのは、たしかに心残りのことなのである。

それと関連して著者に教を乞いたいのは、二中曆所載の道路だけを示したいわゆる道線日本図についてである。著者はこの道線

が行基図から抽出されたもので、これを別種独立の図とする藤田元春博士の説は誤りであるといわれる。たしかにその通りであろう。ただ行基図から抽出されたにもせよ、ひとたびこうした道線図ができると、これを骨格としてその上に改めて国々を肉づけけた新しい地図も生まれ得る。そしてそういう型の図を想定した方が、薛俊の日本考略やリンスホーテンの航海記にのせられた特徴ある日本国の図形の理解をいつそうスムーズにするのではないだろうか。また行基図にしても、その基

図となつた天平の国郡図を日本全図に輯製するに当たつて、徳川幕府の国絵図編纂の場合のような精密な技術が用いられているとは考えがたい。少くとも今日伝えられる行基図から想像すれば、やはり京師を中心に諸国の国府へ道路線を引き、その線を基としてこれに諸国の形を適當に書き加えていつたのではないかと思われる。行基図のなかでもつとも古い面影を伝える延暦改定の日本図は、そのことをよく物語っているようである。たしかに著者のいわれるように地図は原則としてダイメンシヨナルなものであろう。しかしまたリッターのいうように地図のはじまりは道路

図でもある。二中曆図の問題は、古い日本図の類型を決定する上にも、またその作製の技術に関しても重要な意味をもつと思われるので、もう少し詳しい説明がほしかったと惜しまれるのである。

江戸時代になると地図もようやくマニユスクリプトからプリントの時代になるが、著者はまず第三編で京都、江戸などの都市図や万国図など初期の刊図について述べ、つづいて第四編では江戸中期以後幕末に至る刊行日本図を目錄風に解説する。ここに挙げられた日本図が実に二六〇種にもほつていることでも、その調査の周密さが知られよう。第五編は特殊研究にあつてられ、(一)伊能忠敬作の日本図、(二)シーボルト作の日本図、(三)日本作日本図を原図とするヨーロッパ作日本図、(四)日本製日本図の経緯線の投影について、(五)徳川幕府撰日本図、の五編の論文を収め、別に遠久九年の伊勢曆所載と称する日本図についてその偽作であることを明らかにした一文を附録としていいる。いずれも稀観の資料に基づく興味ある論文であるが、なかでもシーボルトの日本図にのせられた松島、竹島に関連して、古地図学の立場から現在日韓両国の係争地と

なつてゐる竹島の問題をとりあげてゐるのが特に注意をひく。この研究は外務省の川上健三氏等に引きつがれ、わが國の領土權主張の有力な根拠となつてゐるのである。なお日ソ間の千島帰屬の問題にも著者の提供した資料

が大いに役立つてゐると聞く。骨董扱ひもされかねない古地図が今日の切實な問題と現実に結びつてゐることを示す生きた例の一つだといえよう。

いずれにしてもこの書によつて、少くとも日本全國に關する限り、夥しい貴重な資料がみごとに整理されて研究者たちの前に提示されたのである。その意味でこの労作は日本地理學史上に朽ちることのない記念碑となるだろう。未墾の沃野はようやく美田と化した。その実りをいかに收穫するかということは、むしろこの書に啓發される読者に与えられた課題であらう。その意味からも、著者の構想される未發表の論著が引きつづき刊行される日

を待望してやまない。
なお本書一一〇頁に地理學史研究第一輯とあるのは人文地理七ノ六の誤である。これは私自身に關係あることなので、著者にお詫びかたがた訂正させていただく。(B5, 二一

六頁、折込図版二葉、アート図版七二頁、七〇〇円、河出書房)

——室賀信夫——

京大西洋史研究室編

傭兵制度の歴史的研究

敗戦後いち早く、新憲法に基づく平和体制を實施したにも拘らず、現在我が國は、再軍備体制を強要せしめられてゐる。資本主義國アメリカの事實上の從屬國として、我が國自体が他ならぬその前衛なのである。これも傭兵化の一現象というも、決して過言ではな

いであらう。かかる祖國の現状を直視する時、我々歴史研究に携わる者は、この冷徹なる事實に、眼を覆う事は出来ない。所謂轉換期の渦中にあつて、一國傭兵化の事實を深く省察する時、それは根深き歴史必然性を挾つてゐるかに思われる。いま京都大学西洋史研究室の方々が、本書を編纂されたことは、この意味からもまことに、意義深きことといわねばならない。事實この書物の「あとがき」に執筆者代表者も、「いろいろと論じあつてゐるうちに、社会の大きな変化と傭兵制度の

成立との間に、必然的な關係があるのでないかということに気がついた」とされ、この研究開始の問題關心も、はつきりうたつていられる。されば研究の基本方向は、「(1)中世末期から近世初期における傭兵制度に研究対象を限定すること、(2)純粹な軍事史的考察ではなく、傭兵制度の成立の社会経済的基盤、政治權力との結びつきという視野から」(あとがき)進められてゐる。要するに、轉換期における傭兵制度をば、その社会経済的基盤の深みから、政治權力との關連において、把握されてゐる。

更にこの研究で注目すべきは、その成果が個人の著作ではなく、多くの人々の共同研究からなつてゐる点である。最近共同研究は社会科学の部面でも、此処彼処で随分流行してゐる。勿論それは、比較的短期間に綜合的成果をあげうる、絶好の方法ではある。然し乍ら往々にして、研究者の自主的立場が失われ、研究における立体的画像をえ難い嫌ひがある。勿論、「共同研究としては、たんにテーマを共通にするだけで、研究者個人がバラバラに研究したのでは意味がない」(あとがき)であらう。ここに共同研究上に横たわる